

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第135号

令和3年10月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

9/14 公開講座「楠正行の生涯を学ぶ」第1回

正行は、父正成のどのような生き方を見て育ったのか

＝ 正行の幼年時代 0歳～11歳 ＝

9月14日、10回シリーズ公開講座がスタートしました。この日は、会場を会議室からホールに移して、会員以外に申し込みのあった11名の受講生も加わり、間隔を保ちながらも熱気にあふれた会場となりました。



桜井の駅で父子別れの場面までの幼年時代、正行を知る史料はほとんど残っていません。父、正成のどのような生き方を見て育ったのか、この時期の正成の事績を辿りました。(写真:公開講座の風景)

太平記で見る正成、活躍6年間

正行が見たであろう、父正成を太平記に探ってみると、以下のとおりです。

巻3/主上御夢の事付けたり楠が事・赤坂の城軍の事(元弘元年)、巻6/楠天王寺出張りの事付けたり隅田・高橋並びに宇都宮が事・正成天王寺の未来記披見の事(元弘2年)、巻7/千劍破の城軍の事、巻11/正成兵庫へ参る事付けたり還幸の事(元弘3年)、巻15/正月二十

七日合戦の事・將軍都落ちの事付けたり薬師丸帰京の事、巻16/正成兵庫に下向の事・正成兄弟討ち死にの事・正成が首故郷へ送る事(延元元年)

太平記によると、正行は、父と後醍醐天皇の出会い、父のゲリラ戦法、建武新政での父の活躍、父の献策と最期の姿をしっかりと見ていたものと思います。そして、その集約が桜井の駅での父の遺訓として、正成の国づくりの基本といえる平和主義・平等主義・武士道の精神・究極としての散り際の潔さを受け継ぎ、吉野朝復権ただ一筋に生きぬいたことが読み取れます。

南都を荒廃させないため笠置へ

正成と後醍醐天皇の出会いの場所となった笠置山ですが、では、いったいなぜ後醍醐天皇は笠置に入ったのでしょうか。

笠置寺の小林慶範前住職は、第1に守りやすく攻めにくいこと、第2に南都を荒廃させないため、第3に笠置山はすべての人々は一列と教える弥勒信仰の山であること、と訴えておられます。

正行8歳の頃、元弘3年の千早城の攻防戦での父のゲリラ戦法をしっかりと見ていたと思われます。千早城は、笠置山同様に三方が谷で切り立ち、北に金剛山に連なる「守りやすく、攻めにくい」山城でした。正成は、下赤坂城、上赤坂城そして千早城を核に、20近い砦群で金剛山一帯を要塞化し、大石作戦・油作戦・藁人形作戦・梯子切り落とし作戦と、当時例を見なかったゲリラ戦法を駆使しました。

また正成の真骨頂は、敵も味方も死ねば皆同じという考え方で、敵と呼ばず寄せ手として、その五輪塔を味方

の塔よりも大きく建てたという寄せ手塚そして味方塚は、正成の人情味が感じられ、地域に愛され、地域と共に生きぬいた正成の心情が読み取れます。

法華経奥書に残る正成の真骨頂

そして、正行 11 歳の時、バランス感覚を持った正成の献策、身体を張った後醍醐天皇への諫言をしっかりと見ていたことでしょう。

正成は、九州敗走直後に急激に勢力を盛り返す足利尊氏を見て、後醍醐天皇に尊氏との和睦策を献策しますが、公家たちに一蹴されます。また、東上してきた尊氏軍を前に、天皇の比叡山臨幸策を献策しますが、坊門清忠の「ただ時を変えず、楠まかり下るべし」の一言を受け、「この戦破るべし」と死覚悟で湊川に向かいました。

正成には私心がなく、ただ一筋に天下の安寧を目指した姿が見てとれます。それは、大楠公真筆といわれる法華経奥書に残っています。

当時武家の立願文や寄進文、奉賛文には、すべて家門の隆盛と武運の長久を祈願していますが、正成の奥書には全く私的・私利的な言葉は見当たりません。この奥書は、前段で法華経の由来とその功德を述べ、我が国においても法華経が尊ばれる由縁を述べたうえで、「私は、天下大

乱を鎮定することができれば、その報賽として、神前に法華経 28 品を一品ずつ毎日転読して神慮をお慰めいたします」と、天皇の叡慮を安んじ奉り、下は四海塗炭の苦を救わんことを祈り、一意国家の安寧を立願するものです。(写真:湊川神社に残る法華経奥書)

正行が見た、湊川に散った正成の生きざまは、まさに武士道の精神そのものであったと思います。新渡戸稲造が提唱した武士道の精神、「勇」「智」「仁」「信」を最下層に「義」「礼」を積み、「忠義」をつくすことで「名誉」を得るという武士道の精神。

私たちの郷土が誇るべき人、正行の原点にも己の大義のために命をも捨て去る潔さ＝最高の榮譽を置くこの武士道の精神が横たわっているものと思います。

忠孝両全のもとには四恩の教え

正行の代名詞は「忠孝両全」ですが、師龍覚坊の「四恩の教え」にその元を見ることができます。

龍覚坊は、正行に四恩の教え、即ち、大空よりもはるか高く、大地よりもなお厚い、産み育ててくれた父母の

恩であり、正統たる国王の恩、一切の生きとし生けるものはすべてわが身の親という衆生の恩、そして最後に仏法・法宝・僧宝の三宝の恩、を教えました。

龍覚坊は、針仕事も立派な武士になる学問と教えたとの記録が残ります。また、険しい山やおおきな川があればこそ、人は平地のありがたさを知ることができるのだ、と苦労辛苦はかってでもすべしとも教えました。

人に仕える道は、それぞれ人によって違うものだが、そこに一本貫く道があり、それは誠心だとも教えました。功名を求めず、利達を願わず、困難に屈せず、誘惑に惑わされず、ただ己の精神の命ずるままに節義をつくすこと、これが真の大丈夫の道だと。

湊川の戦を前に、勅命とはいえ、衆生のためにならない結果を招くとしたらどうするべきか、と正成の気持ちは揺れ動いたようです。この時、龍覚坊は一刀両断です。「臣道は万代を貫く一本の道だ。臣道を貫くためであれば、生きるもよし、死するもよし。臣道が正成ひとりの死によって絶えるとも思っているのか。後に続くものがあることを忘れていてのではないか。ご聖運は天壤無窮じゃ。」と、教えました。

大義名分論の源泉に宋学の影響がありますが、そのルーツは歴史を鑑として見る中国にある国家的風土といえ、正成も、正行も、この歴史を鑑として見る正統論＝正統な朝廷を支え続け、その復権をただ一筋に追い求めたものと思います。

武人として生きたというよりも、一人の人間として、己が正しいと信じる「義」の道ただ一筋に生き、吉野朝＝正統な天皇への忠と、正成＝親への孝を全うし、23 歳という若さで潔く散って逝った正行の人生を緋けば、緋くほど、その魅力は増すばかりです。

四條畷の地にとって、郷土が誇りとするゆかりの人物、楠正行。

正行の受けた教育を見てみると、今の世にこそ必要な教育ではないか、と思います。生きとし生けるすべての生命に愛しみをもち、自らがこの世に生を受けた父母を大切に、感謝の気持ちをもって生きるとき、おのずとこの地球に平和・安寧がやってくるのではないのでしょうか。

次回、10月12日の第2回は、正成亡き後、楠氏の頭領となった正行、史料不在の第1期戦乱の時代、11歳から13歳の頃を取り上げます。乞う、お楽しみに！

(文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)

